「愛語とは」

岡山県　光源寺（こうげんじ）　住職　多飯皓成（おおいこうせい）

「愛語」は、愛を語ると書き、他者に心のこもった優しい言葉をかけることです。

私には、昨年十月に生まれた子どもがいます。親子三人の暮らしを送る中、私は生まれたばかりの子どもの世話をするのに必死で、無口になってしまったり、緊張や不安から肩に力が入ったり、表情が固くなったりしていました。それに対し、妻は泣きじゃくる我が子を前に、緊張や動揺は　一切表情に出さず、不安を伝えないようにしながら、常に温かい言葉をかけ続け、オムツを換えたりお風呂で身体を洗ったりしています。私は、慈愛の心で子供に暖かい言葉を掛け続けている妻の姿に「愛語」の教えを強く感じました。

大本山永平寺を開かれた道元禅師は「愛語」について、「慈念衆生猶如赤子の懐（おも）いを貯えて言語（ごんご）するは愛語なり」とお示しになっています。この言葉は、親が我が子を想うような、慈しみの心から　湧き出る言葉掛けを、広く人々に心がけること、それこそが「愛語」であるという意味です。

また、道元禅師は「愛語」について、こうもお示しです。「徳あるは讃（ほ）むべし、徳なきは憐むべし」と。これは「愛語」の根本的な意味として、時に正しい行いをし徳行のある人には、素直に愛で讃える一方で、時に悪い行いをする人には、憐れみの想いから愛をもって戒めの言葉を語りかけることも「愛語」であるとおっしゃっています。

私にもこんな体験があります。わんぱくだった幼少期、お寺の壁に、油性ペンで大きな落書きをしました。しばらくして、父である師匠に見つかり、めったに叱らない師匠から厳しく叱られました。「お寺や仏具を粗末にしてはならない、大事にしなさい」と。その出来事は私の胸に深く刻まれ、それ以後落書きをすることはありませんでした。私を教え導いた師匠からのお叱りの言葉。それは正に、私への「愛語」そのものでした。

相手を褒め称える言葉、時に厳しい戒めの言葉であっても、その時その場で何度も心を巡らし、考えを巡らせた慈しみの心から発する「愛語」は、相手の心の中に沁みわたっていくのです。私も皆様と共に、「愛語」の実践に努めて参ります。